

院内のコミュニケーションを支援するアートプログラムの開発

－筑波メディカルセンター病院を事例として－

所属：特定非営利活動法人チア・アート 理事長
筑波大学芸術系 研究員

氏名：岩田 祐佳梨

1. 研究目的

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、病院内では面会制限や感染防止対策が厳重に行われており、面会制限によって入院患者と家族が会えないこと、感染防御具などで職員の表情の読み取りにくいことなど、患者や家族が抱える不安やストレスは強いと考えられる。こうしたなかで、アートやデザインなどの表現行為は、対面でのコミュニケーションを補助する役割があると考えられる。そこで、本研究は、医療現場におけるコミュニケーションを支援するアートプログラムを開発することを目的とした。

2. 研究結果

1) 「病院のまなざし」院内展示の検証および巡回展示の企画・実施・検証

本研究では、2020年度から2021年度に研究者と筑波メディカルセンター病院の協働で実施した写真展「病院のまなざし」を対象とした実践研究である（図1）。本写真展は、病院で働く多様な職員の姿を撮影し、約70枚の写真を院内の廊下に展示したものである。利用者（患者・家族）および職員へのアンケート調査を実施した結果、本写真展が利用者－職員間または職員間の相互理解に寄与したと考えられた。一方で、来院制限のために鑑賞者が限定的であったことが課題としてあげられた。そこで、潜在的な病院利用者である地域住民へのアプローチが必要だと考え、地域の商業施設などでの巡回展の企画・実施・検証を行なった。



「病院のまなざし」院内展風景



商業施設での巡回展風景



職員に向けたメッセージボードの内容

図1 「病院のまなざし」実施内容

2) 他施設におけるアート活動の事例調査

「病院のまなざし」と同様に、医療機関において職員の働く姿の写真展を実施した事例として、軽井沢の診療所「ほっちのロッジ」で開催された写真展を事例対象とし、ヒアリング調査や現地調査を行い、活動内容や実施体制を調査した。

3) 病院職員を被写体とする写真を用いたアートプログラムの成立要件

上記の実践および調査をふまえ、写真展の実施プロセスについて、1. 企画立案、2. 撮影、3. 計画・展示、4. 調査分析・フィードバックまでの4つのフェーズについて整理し他結果、医療現場に介入して病院職員を撮影するというアートプログラムを実現させるための要件として、院内における合意形成、感染症対策、倫理的配慮、個人情報の保護があげられた。さらに、各ステークホルダーがどのように実施プロセスに参画したかを示した実施体制図（図2）から読み取れるように、院内組織とアートプロジェクトの運営者が、企画立案、撮影、計画・展示、調査分析・フィードバックまでの一連のプロセスを協働で進めることが必要だと考えられた。

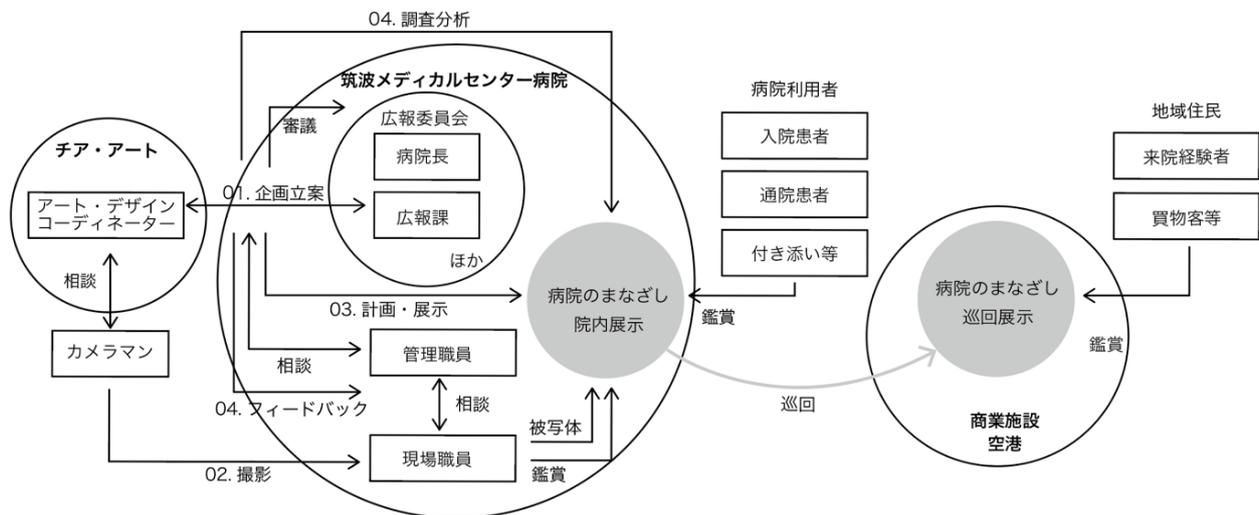


図2 「病院のまなざし」実施体制

3. 研究成果の活用方法

本アートプログラムを今後も筑波メディカルセンター病院において、改変を加えながら継続的な実践を可能にすること、他の医療機関や福祉の現場においても本アートプログラムの展開を可能にすることを目指し、本研究成果についてまとめた報告書「病院のまなざし 病院職員の姿をとらえた写真展」を作成した。



図3 報告書「病院のまなざし 病院職員の姿をとらえた写真展」